事例２：**幼稚園から小学校への引継ぎ**　幼稚園からの支援を引き継いだＢさん（１年生）

幼稚園と小学校が情報交換を行いながら支援を引き継ぎ、入学後、個別の教育支援計画を作成した事例です。保護者は就学に際して不安を持っていました。幼稚園と小学校で、定期的に連絡会を設けることでＢさんについての情報交換を行いました。その結果、スムーズな引き継ぎができ、保護者が安心が得られ、小学校での個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と活用につなげることができました。

＜児童の実態＞

○　小学１年生男子です。年中のときに広汎性発達障害の診断を受けています。
○　幼稚園では、個別の指導計画を作成して支援を行っていました。
○　予測のつかないことがあるとパニックを起こすことがあります。
○　周りの刺激に敏感に反応し、先生の話を聞けていないことがあります。
○　手足の動きにぎこちなさが見られ、運動が苦手です。
○　電車が好きで、電車の話をたくさんしてくれますが、一方的な会話になりがちです。
○　絵を描くことが好きで、立体的で上手な絵を描きます。

## １．個別の教育支援計画作成までの経緯

**保護者の不安の軽減**

☆　小学校と幼稚園、保育園は定期的に次年度の就学幼児に関する**情報交換会**を行っていました。

☆　情報交換会において、保護者から就学に関する不安について把握した小学校は、**話合いの場を設定**しました。

☆　話合いの場においては、幼稚園からの**支援を引き継ぎ**、事前に受け入れ準備を行うことを保護者に告げ、**不安を軽減**しました。

○　幼稚園では、Ｂさんに対し、年中の頃より、保護者と相談して個別の指導計画を作成して支援を行ってきました。視覚的な情報を多く取り入れて、Ｂさんに見通しを持てるような支援を行ったおかげで、幼稚園ではパニックが減り、落ち着いた生活が送れるようになっていました。Ｂさんの保護者もそのことを喜んでいましたが、就学に関して不安を感じてコーディネーターに相談しました。

今は落ち着いているけれど、小学校に入学してからのことが不安です。

小学校の先生と話す機会持ちましょう。

○　小学校と地域の保育園、幼稚園は次年度の就学幼児に関する情報交換会を定期的（学期に１回）に行っていました。１学期の情報交換会のときにＢさんの話題が出て、その後小学校から、管理職、コーディネーターが幼稚園に出向き、話合いを持ちました。その際、Ｂさんのことも話し合われ、小学校はＢさんの実態や現在の支援内容、さらには保護者の就学に関する不安について把握しました。小学校は、保護者の不安を取り除くために、入学後の学校生活等についての話合いを持つこととしました。話合いは、幼稚園で行うことになりました。その際、幼稚園におけるＢさんの様子を把握するため、事前にＢさんの保育場面を小学校の管理職とコーディネーターが参観した上で、話合いに望むようにしました。

○　話合いでは、現在のＢさんの幼稚園及び家庭における様子、支援内容、現在困っていること、保護者の願いや不安に思っていること、などが話し合われました。小学校は、事前に幼稚園から引継ぎを受け、Ｂさんの受け入れ準備を行うつもりであることを保護者に説明しました。さらに、小学校にもコーディネーターが配置されており、困ったことがあれば相談を受ける体制ができていることを話しました。

○　保護者は、小学校と話し合う機会を持つことで、Ｂさんのことを小学校が真剣に考えていることに感謝し、不安を軽減することができました。

幼・小の引継ぎ
事前の支援の話合い

☆　小学校のコーディネーターは、**保育参観や情報交換会**においてＢさんの様子と幼稚園におけるＢさんの支援について把握しました。

☆　小学校では、校内委員会において、具体的なＢさんの支援について**事前に話合い**を行いました。

☆　小学校で話し合われた内容は、幼稚園のコーディネーターを通じて保護者に伝えられ、保護者は小学校の**取組に感謝**しました。

○　小学校のコーディネーターは情報交換会等の機会を捉えて、幼稚園に出向き、保育参観を行うことで、Ｂさんの幼稚園での様子と具体的な支援について把握しました。そして、情報交換した内容を校内委員会で報告し、入学前にＢさんに対する支援の手立てを考えておくことにしました。校内委員会では次のような支援の手立てが話し合われました。

・幼稚園で作成している個別の指導計画を、保護者の了承を得て引き継ぎ、小学校での支援に役立てる。
・入学前に保護者とＢさんに何度か来校してもらい、学校の環境や雰囲気に慣れてもらうようにする。
・担任が決まった段階で、担任の写真を見せたり、事前に顔合わせを行ったりすることで、Ｂさんの不安を軽減する。
・入学式の前日に、Ｂさんと一緒に入学式会場（体育館）において式の練習を行う。
・入学式当日に、コーディネーターがＢさんのそばに寄り添い、その都度、絵や文字、口頭で説明することで、見通しを持たせるようにする。
・入学後は、幼稚園での支援や個別の指導計画を参考としながら、支援の手立てを学年部等のチームで考え実践する。
・学級担任、コーディネーターを中心として、保護者と学校及び家庭の様子を日々情報交換しながらその都度支援を見直す。
・日々の情報交換を通して、Ｂさんに関わっている関係者・関係機関を把握する。
・保護者と信頼関係を築き、同意を得て個別の教育支援計画の作成を行い、それに基づいて個別の指導計画を作成する。

○　小学校の校内委員会で話し合われた内容は、幼稚園のコーディネーターを通じてＢさんの保護者に伝えられました。Ｂさんの保護者は、小学校の取組に感謝しました。そして、入学前に可能な限りＢさんと共に小学校に出向き、新しい環境に慣れるようにしたいという希望が出され、コーディネーターを通じ小学校に連絡されました。

**ポイント：特別な教育的ニーズのある子どもの就学に当たっては、校種間の連携が重要になります。保・幼・小が日常的に連絡を取り合い、定期的に連絡会を持ったり保育参観を行ったりすることで、できるだけ早期に入学幼児の実態把握を行い、入学前に支援の手立ての話合いや校内体制作りを行っておくことが大切です。**

校内支援体制作り①

☆　事前に話し合われた**手立てを実施**しました。
☆　学級担任、コーディネーターは、保護者とＢさんの支援についての話合いを持ちました。
☆　話し合った内容は、校内委員会で検討され**全教職員に周知**されました。

○　小学校では、校内委員会において話し合われた支援の手立てを実施しました。そのおかげで、Ｂさんは入学式のときも比較的落ち着いて過ごすことができました。しかし、学校生活への不安があり、入学後にはときどきパニックを起こすことがありました。
○　学級担任とコーディネーターは、Ｂさんの保護者と学校生活における支援について話し合い、次のような支援を行うことが決められました。

・次の週の予定と次の日の詳しい予定を家庭に知らせ、Ｂさんが学校生活に見通しを持てるようにする。
・学級においては、毎朝、その日の流れを確認する時間を取り、一日の見通しを持てるようにする。また、授業の初めに、その時間の学習内容を示すようにし、一時間の授業の流れの見通しを持てるようにする。
・各授業においては、視覚的な支援を取り入れる。
・休み時間の担当教員を決め、トラブルへの対応や友達同士の関わりへの支援を行う。

○　話し合われた内容は、校内委員会において報告され、検討された後、職員会で全教職員に周知されました。

## 校内支援体制作り②

☆　Ｂさんの情報は**学年会**を中心に情報交換され、必要に応じて校内委員会、職員会を通じて**全教職員に周知**されました。

☆　教職員、全保護者に対する理解・啓発を図るために、**資料の配布、研修会**等を実施しました。

○　入学後、Ｂさんの学校での様子は、主として学年会で情報交換され、全教職員で共通理解を図ることが必要な内容については、校内委員会に諮り、職員会において周知するようにしました。その結果、Ｂさんは徐々に落ち着いて生活できるようになってきました。

○　コーディネーターは､教職員の広汎性発達障害への理解を進めるために次の取組を実施しました。

- ･「えひめの特別支援教育」パンフレット（愛媛県教育委員会）の配布
- ・学校だよりに広汎性発達障害の内容を掲載
- ・特別支援教育校内研修会（講師：特別支援学校のコーディネーター）

○　全体の保護者に対しては、教職員と同様のパンフレット、学校だよりの配布に加え、ＰＴＡ総会を利用しての特別支援教育の話（コーディネーターより）、人権・同和教育研修会を利用しての保護者研修会（講師：教育センター所員）を実施して理解・啓発に努めました。その中で個別の教育支援計画や個別の指導計画の内容も扱うようにしました。

## Ｂさんの保護者との信頼関係の構築

☆　**日々の情報交換**を行う中で、保護者から学校生活に限らず様々な内容についての情報が入るようになってきました。

☆　学校外の習い事のトラブルを把握した担任は、コーディネーターと相談して、**支援会議**を開催し、**個別の教育支援計画を作成**することを保護者に話すことにしました。

☆　懇談時に個別の教育支援計画の話を行った結果、保護者に、**個別の教育支援計画の作成の同意**が得られました。

○　担任は、連絡ノートを利用して保護者と日々情報交換を行いました。できるだけその日のＢさんの様子が保護者に分かるように、具体的に書くことを心掛けました。連絡帳で伝えにくい場合は、電話で詳しい様子を伝えるようにしました。

○　家庭からの連絡は、初めのうちは学校生活に関わるものが中心でしたが、Ｂさんが学校生活に慣れ、落ち着いて活動できることが増えてくると、徐々に家庭以外の生活についての内容も見られるようになりました。それにより、Ｂさんが習い事をしていることや、そこでトラブルが起こっていることなどを把握することができました。

○　担任は、保護者から習い事でのトラブルが出された場合は、コーディネーターに相談した後にアドバイスをするようにしました。しかし、保護者にアドバイスをするだけでは限界があると感じ、関係者で話し合う機会を持つことが必要であると考えました。

○　保護者との信頼関係ができてきたと感じた担任は、関係者との連携についてコーディネーターに相談しました。その際、支援会議を開き、個別の教育支援計画を作成することが共通認識されました。この内容は、校内委員会で審議され、担任とコーディネーターから保護者に伝えることとなりました。

○　懇談の際に、コーディネーターが同席し、保護者に対して個別の教育支援計画についての話を行いました。個別の教育支援計画についての説明は、教育センターが出している、「手引（試案)」の中の「保護者説明用資料」が使われました。習い事の際のトラブルに悩んでいた保護者は、学校が一緒になって支援を考えることに喜び、支援会議の開催や、個別の教育支援計画の作成に対して前向きに考えることにつながりました。そして、後日、現在関わっている関係者・関係機関についての情報の提供がありました。その後、学校が主体となって関係者に連絡を取って情報収集を行うことにも同意が得られました。

○　後日、保護者に同意書の提出があり、個別の教育支援計画の作成に取り掛かることにしました。

**留意点**：個別の教育支援計画の作成を行うためには、保護者との信頼関係を構築することが不可欠です。そのためには、まず、学校で手立てを考え支援を実施し、その内容を保護者と情報交換を継続していくことが大切です。校内で手立てを講じる前に相談機関等を紹介することは、保護者の不信感を招くことがあるので注意が必要です。

## ２．個別の教育支援計画の作成

**個別の教育支援計画（案）の作成**

☆　Ｂさんと保護者の願いの把握と**関係者・関係機関を確認**し、情報収集を行いました。

☆　担任とコーディネーターは、**保護者と話し合い**、個別の教育支援計画（案）を作成し、**校内委員会**で、検討しました。

１　作成に当たっては、Ｂさんと保護者の願いからスタートしました。

学校で友達と楽しく過ごしたい。

学校生活を楽しんでほしい。

Ｂさん　　保護者

２　担任は、保護者と個別の教育支援計画の作成に参画する関係者・関係機関を確認しました。医療機関、スイミングスクール、学習塾が挙がりました。

３　保護者の了承を得て、担任とコーディネーターがスイミングスクールの様子を見学しました。医療機関と学習塾の様子は、保護者を通じて情報収集しました。
支援会議の参加は、スイミングスクールの講師以外は参加が難しかったため、事前に送付した調査票の返送を依頼し、個別の教育支援計画（案）作成の参考としました。

４　担任とコーディネーターが保護者と話し合い、個別の教育支援計画（案）を作成し、校内委員会で検討されました。

**支援会議の開催**

☆　支援会議で**個別の教育支援計画を作成**しました。

☆　次回の支援会議に**評価を行うことについて確認**しました。

☆　**個人情報の取扱い、保管方法**について確認しました。

○　支援会議では、各関係者・関係機関の現在の状況を報告し、個別の教育支援計画（案）を基に、個別の教育支援計画を作成しました。
○　次回の支援会議の開催時期（新年度初め）と評価を行うことについて確認しました。
○　個人情報の取扱いについて確認しました。
○　保管方法について確認しました。

＜支援会議の参加者＞
・校内関係者（管理職、学年主任、担任、コーディネーター、養護教諭）
・スイミングスクール講師
・保護者

## ３．個別の教育支援計画の活用

**個別の指導計画の作成**

☆　個別の教育支援計画を受け、**個別の指導計画**を作成しました。

○　学校では、個別の教育支援計画を受けて、個別の指導計画（案）を作成しました。その際、幼稚園で作成した個別の指導計画も参考にしました。
○　校内委員会で、目標や支援内容等が話し合われ、個別の指導計画を作成し、それに基づいて支援を行うこととなりました。

**評価**

☆　個別の教育支援計画は、個別の指導計画の評価を基に、年度末に**評価**を行い、**見直し**ました。

○　個別の指導計画は、各学期末に評価を行い、その都度、目標や支援の手立ての見直しを行いました。
○　年度末に、個別の指導計画の評価を基に、個別の教育支援計画の評価を行い、個別の教育支援計画を見直しました。
○　コーディネーターは、各関係者・関係機関にも年度末に評価を依頼し、まとめたものを、次年度始めの支援会議に提出しました。

幼稚園と小学校が連携を図ったことで、入学前に支援の手立てを十分考えた上で、Ｂさんを受け入れることができました。Ｂさんは、入学直後はパニックを起こすこともあったのですが、今では不安が軽減され、落ち着いた学校生活を送れるようになり、パニックも減ってきています。今後もＢさんが家庭、学校、地域で落ち着いた生活が送れるよう、支援の手立てをチームで考えていきたいと思います。